

異世界で失敗しない100の方法3

Main Characters
登場人物
紹介



ジャック

ハイルと共に旅をしている弓の名手。やんちゃな性格で、周囲の人を明るくする。



ウォーレン

ハイルの旅の仲間。巨大な体躯と厳めしい顔つきだが、態度は紳士そのもの。



バナッサ

ダラスの町で便利屋を営んでいる。姐御肌で面倒見がいい。



エメリア

ダラスの町の情報屋。泣きぼくろが色っぽい、妖艶な美女。



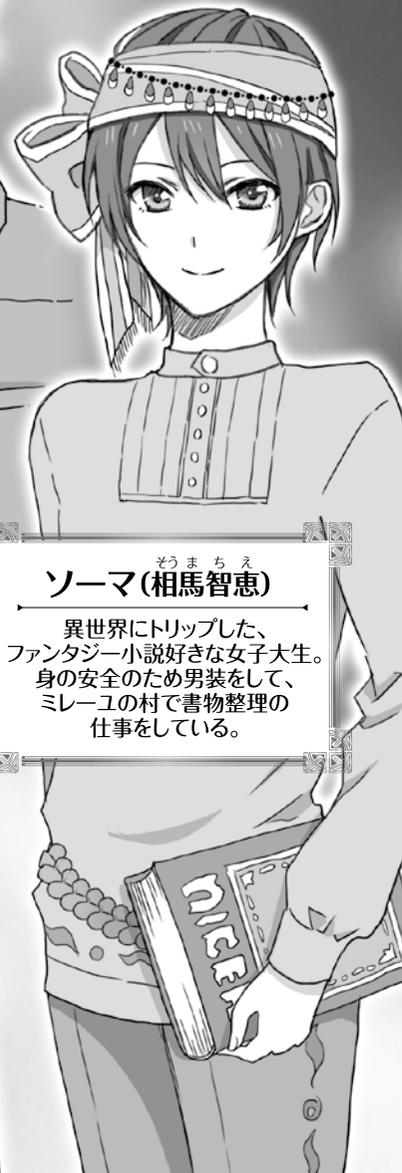
アレン

ダラスの町で出会ったワイルドな青年。妙にソーマを気に入ったようで……？



ハイル

金髪碧眼を持つ美貌の旅の剣士。無口だが、行動は紳士で優しい。ソーマに心を開き、友人となる。



ソーマ(相馬智恵)

異世界にトリップした、ファンタジー小説好きな女子大生。身の安全のため男装をして、ミレーユの村で書物整理の仕事をしている。



セス

ハイルの旅の仲間。常に冷静沈着で、感情がなかなか表に出ない。

1 旅でまた一つ仲間のことを知りましょう

「うん、よし……これも持っていこうかな」

ここは、ミレーユの村にある自宅の居間。

私——相馬智恵は今、たくさんの荷物を前に、旅の支度で大忙しだ。

持つていくのは、町で売ろうと思っている本に着替えが数着、携帯食料。相乗り用の馬に積んでいくから、荷物はできるだけ軽くしなければならぬ。

私が慌ただしくこんなことをしているのは、このミレーユから北東にずっと進んだ先にあるダラスの町に、急遽向かうことになったからだ。

ダラスでは今、精霊の賢妃の再来と呼ばれる少女が、見世物を行っているらしい。

その少女が本当に精霊の賢妃か確認するため、賢妃探しの任に就いている騎士——ハイルとセスさんは今日、ダラスへ向かうという。そこで、私も同行させてもらうことにしたのだ。

私はミレーユに住むただの学者で、縁あって彼らの任務に協力しているだけなのだけれど——どうしても一緒に行きたい理由があった。

「……精霊の賢妃、かあ」

それは、遠い異邦の地から現れた人間——つまり、異世界人である私を指す言葉だ。

就職活動の帰り道、真つ暗な穴に落ちて、目覚めたら地球ではない異世界の森の中にいた。

よくある異世界トリップ小説では、女性の主人公が危険な目に遭ったり、その世界にはない知識や文化を広めて異端視されたりする。

同じような失敗を犯さないよう、私は男装し、旅の学者だと名乗ることにした。多少この世界の常識から外れた行動を取っても、『ちよつと変わった学者さん』として流してもらえるように。

その後、マチルダさんという気の良い女性の助けもあり、ミレーユの村で書物整理の仕事を始めた。そしてなんとか腰を落着け、のんびりと穏やかな日々を送っていたとき——ハイルたち四人の騎士と出会った。

彼らは国王の命を受け、精霊の賢妃と呼ばれる女性を探しているらしい。

——このとき、私は知ってしまった。

国王の探す異世界人……精霊の賢妃が自分であることを。

自分が賢妃だと明かした場合、王宮に連れていかれ、国王の保護と監視のもと、一生を過ごすことになるという。さらには、国王の望む形で役に立てなかった場合——

「害悪と見なされ、排除されるかもしれない……か」

私はぼつりと呟く。

今から百年以上も前、精霊の賢妃と呼ばれた異世界人の女性がいた。やがて彼女を崇拜する精霊派が誕生し、彼らは国王よりも賢妃を崇め奉るようになった。

当時の賢妃亡き後も、精霊派の思想は変わっていない。そのため、新たな異世界人——つまり賢妃が市井にいと、王政に反旗を翻しかねない者たちに利用される可能性もある。

今のところ、私がトリップしたことに関する手がかりはなく、元の世界に帰れるかはわからない。むしろ帰れない可能性の方が高い気がする。ならばせめて、大好きなこの村で一生を穏やかに過ごしたい。だから私は、自分が女であること——そして精霊の賢妃であることを親しい人にも隠し続けることにした。

私は今、男の学者ソーマとして、友人となったハイルたちの手伝いをしている。

噂の精霊の賢妃を確認するため、ダラスへ向かうハイルたち。もし彼らが賢妃ではない人物——それに成り代わろうとしている人物を誤って王のもとへ連れていった場合、処罰されてしまう可能性があった。

……私は、自分が精霊の賢妃であることを名乗れない。ただ、相手が異世界人であるかどうかはわかるのではないかと思う。

私以外に賢妃はいるのか、地球以外から来た異世界人はいるのかなど、わからないこともたくさんあるけれど、少しでもハイルたちを補佐したくて、今回、旅の同行を願ったのだ。

そこまで考え……ふと、一着の服が目に入る。

それは、先ほどマチルダさんから手渡された、清楚な雰囲気の水色のワンピース。

マチルダさんは私が女だと気づき、これを着て本当の性別を明かしたらいいと言ってくれた。だが、それだけではない。

「……うん、やっぱり早くしまおう」

男でいようと決意したはずなのに、ワンピースを見てみると少し切ない心地になる。首を小さく振って立ち上がり、ハイルとセスさんが戻ってくる前に、それを洋服棚にしまおうとしたときだった。

——ふいに、玄関の扉が開いた。

「ソーマ、邪魔をして悪い。一つ伝えておきたいことが……」

「うわあ!!」

扉が開くと同時に声が聞こえ、私は思わずワンピースをばさつと落としてしまった。

すぐに、わずかに驚いたような、そして申し訳なさそうなハイルの音が耳に入ってくる。

「すまない。どうやら驚かせてしまったようだな」

「あ……い、いえ、こちらこそすみません。おかしな声を上げてしまって」

ドキドキと煩い心臓を落ち着かせながら、落としたワンピースを拾い、慌てて振り返る。

過剰反応してしまい、私より彼の方が驚いたことだろう。

いつもきちんとしている彼が珍しくノックを忘れるなんて、それだけ急用なのかもしれない。

私は、小さく微笑んで先を促す。

「お帰りなさい、ハイル。早かったですね。何か御用ですか？」

「ああ。一つ伝えておきたいことがあったんだが……」

近くまで歩み寄ってきた彼の声がふいに途切れ、私はきよんとする。一方の彼は、不思議そう

に私の手元を見つめていた。——正確には、可愛らしい女性物の服、ワンピースを。

「あ……」

一瞬、血の気が引いたものの、すぐに大丈夫だと思い直す。

さすがに女性物の服を持っていただけで、性別を疑われたりはしないだろう。

この家には、年頃の少女であるメアリーだつてよく訪れる。彼女の服だと思われるか、私に女装癖があると疑われるくらいで……

——それはそれで、ちよつと微妙だ。男装はしていても、特殊な嗜好などないのに。

私はこぼんと咳をすると、冷静な口調を意識して話す。

「あの、これは先ほどマチルダさんが持ってきてくださったんです。近々、村の祭りがあるものですよから、そこで使う晴れ着をと」

「女性物の晴れ着を、か？——ああ。そういえばソーマには、年頃の娘の助手がいたな」

案の定、ハイルはメアリー用だと思つたらしい。だが祭りの当日に彼女が着るのは、深緑色のワンピースだ。ハイルとメアリーはこの家で顔を合わせ、短いながら言葉を交わすこともある。齟齬が生じてはまずいと思い、真実を交ぜつつ、ぼかして続ける。

「いえ、メアリー用ではなくて、その……私に良い人ができたら、そのときに使うようにとマチルダさんがくださったんです」

うん、決して嘘は言っていないし、これで大丈夫なはずだ。

私を男だと思つているハイルなら、いつか恋人に贈るためのものだと思つてくれるだろう。

そのまま平穩に話が続くかと思いきや——なぜかハイルは、ぴくりと眉を擡めた。

「……ソーマに、良い人？」

低く、わずかに硬い声だった。うーん、そんなにありえなさそうだったかな……

確かに私は、あまりもてるタイプではないと思うけれど、ここは納得してもらわないとまずい。心中では冷や汗をかきつつも、表面上はのほほんとした笑みで続ける。

「あ、はい。私みたいな冴えない学者にそのような方ができるか、はなはだ怪しいところではあります。むしろ、ハイルの方が先に大切な方と巡り合いそうですね……」

ハイルはなにも言わなかった。代わりに、強張った表情のまま私からふいと視線を逸らす。

その横顔は、まるで続きを聞きたくないと言っているかのように——じわりと焦った。

気づかないうちに、不快にさせてしまったのかと不安になるが、思い当たる原因はない。こういうとき、男の友人ならなんて言うだろう。逸る気持ちで、思考を巡らせる。

そうだ。たぶんこんな風に、友の前途を祝すようなことを——

「あ、あの！ ハイルに良い人ができたら、私も友人として心からお祝いしますね」

なぜか胸がぎゅっと痛んだけれど、気に留める余裕もなく私は続きを口にする。

「お祝いというか、ハイルの大切な方に、是非ご挨拶できたら嬉し……」

だがそれは、言い終わる前に遮られた。

「——必要ない」

「……え？」

「祝ってくれなくていい」

硬い——拒絶のこもった声。

驚いた私は、呆然とハイルを見上げる。彼が私にそういう声を向けたのは、初めてだった。

「あの、ハイル……?」

呼びかけると彼は、はっとした様子でこちらを見た。

「いや……すまない。決してソーマから祝福されることが嫌なわけではなくて……」

だが言葉は途切れ、青い瞳がどこか苦しげに細められていく。普段は泰然とした大人の男性なのに、今は戸惑う少年のように見えた。私は、ゆっくりと首を振る。

「いいえ、ハイル……大丈夫です。あなたが理由もなく、人の気持ちを無下にする方ではないと知っていますから」

だからこそ、心配でもあった。彼がこんな様子を見せるなんて、心を乱されるようなことでももしかしたらさつき彼が外出していた間に、なにか辛いことがあったのかもしれない。私は、ワンピースをテーブルに置くと、ゆっくりハイルに歩み寄る。

そして右手を伸ばし、頭一つ高い位置にある彼の頬にそっと触れた。

「なにか、気に病まれるようなことでもありましたか……? もしよろしければ、お話ししてください。少しでも吐き出すと、気持ちが楽になることもありますから」

私は、ハイルをまっすぐに見上げる。目が合うと、青い瞳が一瞬、狼狽したように揺れた。

「ソーマ……」

そのまましばし黙っていた彼だったが、やがて溜息を吐き、ぼつりと呟いた。

「……悪い。ソーマを心配させるようなことがあったわけじゃないんだ。ただ……最近、自分で自分がわからなくなるときがある」

どこか戸惑いの滲んだ声だった。私はそっと問い返す。

「わからない……？」

彼は、頬に添えていた私の右手に自分の左手を重ねると、不思議そうに言った。

「ああ。なぜ心が乱れるのかわからなくて困惑するときがある。だが、ソーマに触れるとそれが消える。……不思議だ」

その様子がなんだかあどけない子供のように見えて、私は思わずくすりと微笑む。

「私の手でよろしければ、いつでもお貸しします。少しでもハイルの力になれば嬉しいですから」

実を言えば、こうして向かい合い、彼の頬に手をあてているのはちよつと——いや、かなり照れくさい。ただ、彼がそれで心安らかになれるなら、いくらでもそうしようと思った。

——とはいえ、あまり長いこと触れているのも不躰だろう。

頃合いを見計らって手を引つ込めようとしたが、上から重ねられたハイルの手に押さえられ、びくともしない。

あ、あれ？ 動かない。予想外のことに少し焦り、また彼の掌の大きさに驚いた。

剣を振るい続けた、節くれ立った手。——力強く大きな、大人の男性の手だ。

ふいに、心臓がどくと脈打つ。

「——本当に不思議だ。触れられたときだけじゃなく、こうしてソーマに触れていても落ち着く」

「そ、そうですか……それは、あの、良かったです」

しみじみと呟くハイルに、私はぎこちなく視線を伏せ、そう返すことしかできなかった。

さつきまでなにも思わなかった掌のぬくもりが、なぜか今は妙に熱く感じられる。

さらには異様に鼓動が速くなつていき、そんな自分の変化に困惑した。

なんだろう。彼の傍にいと、おかしくなりそう。

「あ、あの。それでは、程よく落ち着いたところで旅の支度の続きに取りかかりますね。そろそろセスさんも戻つてこられるでしょうし」

なんとか朗らかな口調でそう提案するが、静かな声に却下された。

「まだだ」

「え？ ですが、そろそろ時間が……」

「セスが戻るまで時間はある。それに、まだ足りない」

彼は、私の手を自らの頬に押しあてたまま囁いた。

「……あと少しだけこうしていたんだ。ソーマ」

わずかに掠れて聞こえる、涼しげな声。海のような青い瞳が、私を見つめていた。

「あ、の……」

いつまで経っても見慣れない、凛々しい容貌のハイル。

彼に至近距離で囁かれると、私はもはや言葉らしい言葉を紡ぐことができなかった。頬が熱く、とにかく心臓が煩い。このまま破裂してしまうのではないかと不安になるぐらいだ。

ふいに、マチルダさんの言葉が浮かぶ。

『男に守られる幸せってのを、先生にも感じてほしい』

そう言っ、どこか切なげな笑みを浮かべたマチルダさん。

どうして、そんなことを思い出したんだろう。今の私は男で、守る側なのに……

「ソーマ？」

動揺して俯いた私を不思議に思ったのか、ハイルが名を呼ぶ。

だが私は、すぐ返事をする事ができなかった。

なんと答えたら良いかわからない。混乱し、熱を持った情けない顔を見られたくない。

こんなんじゃない駄目だ。黙っ、いてもハイルを困らせるだけなのに。

なにか言わないと……。そうだ。はっと顔を上げる。

「あ、あの。そういえばハイル、なにか用事があったんですね」

「……ああ。そうだったな」

ハイルが私の手の上に重ねていた左手をすつと離す。ようやく彼の体温が離れ、自由になったことにほっとしながら、私は穏やかな声音を意識して言葉を続けた。

「もしかして、ジャックから伝言でもありましたか？」

彼は、さつきまで仲間の騎士であるジャックを探しに、近場の森を巡っていたはずだ。それならたぶん——と推測したのだが、意外な返事が返ってくる。

「いや、そういうわけじゃない。そもそもあいつとは会えなかった」

「あ……いらっしやらなかったのですか」

思わず目を瞬かせると、ハイルが静かな声で続けた。

「ああ。どうやらいつもより遠い場所まで足を延ばしたらしい。近場の森をいくつか巡ってみたが、あいつの姿も印も見当たらなかった」

「印？」

「俺たち騎士は森や山を探索するとき、仲間内でだけ通じる印を所定の位置に残している。それがこの近辺の森では見当たらなかったんだ」

「ああ……そうやって、互いに行動を把握できるようにしているのですね」

木の幹にマークを刻んだり、紐を結びつけたり、そんな感じだろうか。

「ええと……それでは、ジャックが戻られるまでもうしばらく待ちますか？ 闇雲に探しても、今

度はすれ違いになってしまいそうですし。夕方には戻ると仰っていましたから、時間はかかるかもしれませんが、待っていればそのうち……」

「いや、夕刻まで三人待機するのは時間が惜しい。俺はもう少しジャックを探すから、ソーマとセ

スで先にダラスへ向かってくれ。俺もあいつに事の成り行きを伝え次第、すぐ後を追う」

「それでしたら、村の誰かにジャックへの伝言を頼んで、ハイルも一緒に出発しては……」

そこまで言いかけ、すぐにはたと気づく。単に行き先を告げるならまだしも、後から落ち合う可能性があるなら、合流地点など詳しい情報も伝えておかないとまずい。

そもそも彼らの任務は、国王直々の極秘任務。それに関わる情報を、おいそれと部外者の耳に入れるのは、できる限り避けたいはずだ。

だからといって書き置きを残していくにしても、この世界では紙は貴重で、気軽にメモ書きに使えるようなものではない。

「うーん……やっぱり、直接伝えた方が色々と問題なさそうですね」

前言撤回した私に、ハイルは静かに頷いた。

「ああ。他の者たちに任務の内容を悟られるようなことは極力避けたい。だが、変にぼかして言伝をしても、ジャックには上手く伝わらないだろうからな」

それに、馬に相乗りすればどうしたって速度が落ちる。私がセスさんの馬に乗って先に向かい、距離を稼いだ方が効率もいい。一人乗りするハイルなら、そう時間を置かずに追いつけるだろう。

私はそこまで考えて、今度はしっかりと頷き返す。

「わかりました。それでは、セスさんと二人で先にダラスへ向かいますね」

「ああ。合流場所や情報をくれそうな店については、すでにセスに伝えてある。ダラスに着いたらあいつの指示で動いてくれ」

そこでハイルは言葉を止め、私の首元を見やる。

「それと、ソーマ。話は変わるが、以前に渡した首飾りは持っているか？」

「はい、今も身に付けています。……つと、すみません。そういえばお預かりしたままでした」

そうだった。ハイルと再会するまで預かるという話だったのに、肌馴染んですっかり返し忘れていた。慌てて首飾りを首から引き抜き、ハイルへと差し出す。

「申し訳ありません、長らくお預かりして。ありがとうございます」

「いや、返さなくていい。身に付けているならちようど良かった。そのまま持っていてくれ」

「えっ？ ですが……」

きよとんと首を傾げた私に、ハイルは静かにかぶりを振る。

「返してほしいわけじゃなく、ダラスに持って行ってほしかったんだ。俺の顔のきく店でそれを見せれば、俺がいなくても便宜を図ってくれるはずだ。そんな小さなものでも、多少はソーマの力になる。どうか使ってほしい」

「ああ、それで……色々と考えてくださっていたのですね」

彼の言いたかったことを理解し、私は手の中のペンダントに視線を落とす。

銀色のペンダントトップに刻まれた、鷲のような紋章。騎士の位を指すものなのか家柄を示すものなのかはわからないけれど、少なくとも事情を知る人には、彼の身分を一目で明らかにするものなだろう。そんな大切なものを預けてもらえることが、緊張する反面、嬉しくもある。

なくさないよう、傷つけないよう、慎重に首にかけ直す。

離れている間も私を気遣ってくれる彼に、自然とほのかな笑みが浮かんだ。

「ありがとうございます、ハイル。もし必要になった際には、そのように使わせて頂きますね」

そんな風にハイルと会話しつつ、旅の荷物をまとめ終わると——玄関の扉を叩く音が響いた。私は反射的に声を張り上げる。

「あ、はい！ 今開けます」

たぶんセスさんだろう。ハイルに断つて玄関へ向かうと、やはりセスさんの姿があった。「お帰りなさい、セスさん」

「只今戻りました。……ああ、隊長もすでに戻られているようですね」

そう言うと彼は、相変わらずの無表情を室内に向ける。表にハイルの馬が繋がれているのは見ただから、確認というより、挨拶代わりに口にしたのだろう。

「はい、つい先ほど帰ってこられて。私も、旅の支度が済んだところです」

「では、すぐに出発できますね」

そんな私たちの会話に、少し離れた場所からハイルも加わる。

「そのことなんだが、セス。少し事情が変わった」

「……というど？」

不思議そうな眼差しを向けたセスさんに、ハイルが落ち着いた声音で続ける。

「周辺の森を探したが、ジャックが捕まらなかった。俺はあいつに事情を伝えてからお前たちの後を追う。先に二人でダラスに向かつていてほしい」

「それは構いませんが……ダラスに詳しい隊長が先に向かった方がよろしいのでは？ ジャックへの言伝ならば、私が請け負います」

「いや、俺は途中、別の町に寄る用事もある。お前に先に向かつてもらった方がやりやすい」「別の町……ですか」

「ああ。今の格好ではまずいだろう。ダラスへ行く前に、近場の町で身なりを整えておきたい」

「なるほど……確かにその方が賢明でしょうね。わかりました。では先に向かっています」納得した様子でセスさんが頷く。

私は二人のそんなやりとりが不思議で、小さく首を傾げた。ハイルはこれまで通り旅の剣士の格好で、特に装備を整え直す必要がないような気がしたからだ。

——ただ、昨晚の夜盗退治で、ハイルの外套や下袴にはうつつすら血痕が残っている。

着替えた筒袖は綺麗だけれど、それ以外の衣服からは血生臭い出来事が垣間見え、周囲の人々を警戒させてしまう恐れがあった。

情報収集する際、それが支障になる可能性は高い。

そんなことを考える私の傍ら、二人の会話はまだ続いている。

「では、私とご友人が先に向かうとして。合流場所は、隊長から伺った宿屋でよろしいですか？」

「ああ。俺もダラスに着いたら、まずそこに向かう。なにかあれば、宿屋の主人に伝言を預けてくれ。信頼できる店だから情報を漏らすこともない。外出時も上手く取り計らってくれるだろう」

「了解しました。それでは、先に情報収集を始めています」

「頼む」

どうやらそこで話はまとまったらしい。

本当にこの二人の会話には無駄がないなあと、私は少し苦笑する。根が真面目な二人だから、軽口を言い合う姿は想像しづらけれど、それにしたって同年代同士の気安さも感じられず徹底しているなと思う。

だが考えてみれば、普段陽気なジャックも、任務が関わると真剣な態度に切り替えていた。忠実かつ迅速に任務を行うことが、騎士の務めなのだろう。

——うん。私も彼らの足を引つ張らないよう、てきぱき動いていこう。そんな風に思い直していると、セスさんがくるりところらへを向いた。

「そろそろ出発しますが、貴方は村の人々に事情を伝えておかなくても大丈夫ですか？」

「ありがとうございます、それは大丈夫です。先ほどマチルダさんがいらっしやっただけ、数日家を空けると伝えていますので」

それにマチルダさんは、メアリーへの伝言も快く請け負ってくれた。世話好きな彼女のことだから、きつと早々に伝えてくれるだろう。

私の答えに頷き、セスさんが玄関の方へすつと身を翻す。

「では、ついてきてください。馬は外の樹に繋いであります」

「あ、はい！」

私は床に置いていた荷物を胸に抱え、ハイルと共にセスさんの後を追ったのだった。

外に出ると、頭上には青空が広がっていた。

樹に繋がれて草を食んでいる二頭の馬に、柔らかな木漏れ日が降り注いでいる。

私はセスさんの灰茶の馬に荷物を積むと、鞍に跨る。二度目ということもあり、前よりスムーズに乗ることができた。セスさんもすぐに慣れた動作で飛び乗り、私の後ろに収まった。

ただ、どうやら私は前に寄りすぎていたらしい。後ろから片手で腰を引き寄せられる。

「もう少しこちらに寄ってください。そのままでは前方に重心が行きすぎる」

「あ……ありがとうございます」

慌てて上半身を捻り、お礼を言う。そうすれば当然、セスさんと視線が合うわけで——思った以上に近くにあった彼の顔に驚きつつ、改めてセスさんは顔立ちが整ってるんだなあ、などと妙に感心してしまう。近くで見ると、すごく睫毛が長い。

けれど、ハイルの顔を間近で見たときのように心臓が煩くなることはなかった。やっぱり私は、ハイルみたいな凛々しい風貌に弱いのもかもしれない。

なんとなく二人の違いについて考えていると、セスさんが淡々と言った。

「あまり見つめられると、穴が空きます」

「あ……す、すみません。不躰に眺めてしまっただけ」

失礼なことをしたと思い、目を伏せた私に、セスさんは否定の言葉を返す。

「いえ、貴方ではなく。隊長の視線が鋭すぎて」

「え？ ええと、ハイル……ですか？」

なぜここで彼が出てくるのだろうか。きょとんとしてハイルを見れば、セスさんの言葉通りこちら

をじつと見つめていた。

視線が鋭いというか、なんだか少し表情が強張っているような……

もしかしたら、私が騎乗に慣れない様子を見せたため、落馬の心配をさせてしまったのかもしれない。私はぐつと右手で握り拳を作り、安心させるように笑みを向ける。

「あの、大丈夫ですよ、ハイル。同乗させて頂くのはこれで二度目なので、二人乗りのコツはいぶ掴めています。それに、変に動いてセスさんの邪魔をしないよう、重々気をつけますから」

「——いや、それは心配していない。セスの乗馬の腕前は信頼しているし、ソーマがセスの手を煩わせるとも思っていない」

「ええと、では……」

どうやら違ったらしい。彼がなにを心配したのかわからず、私はさらに困惑した。

そんな私を見て、ハイルが小さく首を振る。そして顔を上げたときには、いつもの落ち着いた表情に戻っていた。

「いや……気にしないでくれ。それより、ダラスに着いてからのことだが」

「あ、はい」

どうやら思考を切り替えたらしい彼に合わせ、私も気を引き締め直す。

「さつきセスにも伝えたことだが、到着したら、まずは町の南にある『銀のかささぎ亭』という宿屋に向かってほしい。馴染みの店主がいるから、色々力になってくれるはずだ」

『銀のかささぎ亭』ですね。了解しました」

やっぱりお店の名前もファンタジーなんだなあと胸をときめかせつつ、表向きは真面目に頷く。

「あとは、裏道にバネッサという女性が営む便利屋がある。一風変わった店主だが、困ったことがあれば扉を叩くといい。困ったことがなければ……特に関わらなくていい」

「そのようなお店もあるんですね。わかりました。覚えておきます」

それにしても、なんだか不思議な紹介の仕方だ。頼りになるけれど、あまり頼ってほしくない感じというか……よほど癖のある人物なんだろうか。もう少し尋ねようかと口を開きかけたとき、こちらを見上げたハイルとぼつちり目が合った。私は思わず、くすりと微笑む。

「どうかしたのか？」

「あ、いえ……すみません、なんだか新鮮で。いつも私が見上げる側なものだから」
こうして馬に乗っていると、長身のハイルより高い位置に私の顔がきて、見下ろす形になる。

「ああ……そういえばそうだな」

真面目に頷いたハイルに、私はふふっと笑って続ける。

「なんだか身長が高くなった気分です。今なら、ハイルの髪にも簡単に手が届きそうですね」

「ソーマが触れたいなら、いつでも好きなきに触れればいい」

「えっ？ いえ、お気持ち嬉しいですが、さすがにそれは……」

まさかそんな台詞が返ってくると思わず、私はわずかに慌てた。友人とはいえ、そこまで自由に振る舞うのは失礼に当たるだろう。

だがハイルは私の動揺を余所に、男らしく涼しげな声で続ける。

「——触られていると落ち着く。さつき、俺はそう言った」

「あ、あの、ハイル……」

どうしよう。ハイルが友情を向けてくれるのは嬉しいけれど、やっぱり私は彼に見つめられると駄目みたいだ。おそらく赤くなっているだろう顔を見られたくなくて、私は俯く。

だが馬上にいるため、顔を伏せても彼の視界に入ってしまう、表情を隠せない。私は、恥ずかしさに潤んだ瞳を向けて口を開いた。

「……なんでもしますから、あまり見たいやです、ハイル」

瞬間、ハイルが瞳目してぴしりと固まった。そこに、セスさんから声がかかる。

「——お二人とも、その辺でよろしいでしょうか」

「あ……す、すみません、お待たせしてしまっただようで」

そうだ、雑談している場合じゃない。はっと謝った私に、セスさんは怒った様子もなく首を振る。

「いえ。特に待つてはいませんが、止めに入らないと、隊長がどうにも危険だと感じたので」

「ああ……。確かに、あまり近づくと馬に蹴られる危険がありますものね」

いくらハイルの気配に慣れているセスさんの馬とはいえ、蹴られて怪我をする可能性もゼロではない。

「いえ、そういう意味ではなく。馬以上に危険な存在が近づいていたというか……むしろ、馬に蹴られそうだったのは私です」

そんな不思議な台詞を口にする、セスさんは嘆息してハイルに視線を向けた。

「ともかく、最初にすべきことがよく見えました。貴方がた——特に隊長は、ダラスに着いたら宿屋よりも先に書物屋に向かつてください」

「書物屋？ それは構わないが……」

少しの間固まっていたハイルだったが、どうやら復活したらしい。

不思議そうに返した彼に、セスさんはきつぱりと告げる。

「では書物屋に着いたら辞書を引き、『友人』の意味を調べ直してください。任務はそれからです」

「は、はい……」

「よくわからないが——わかった」

有無を言わせないセスさんの声音に、逆らってはまずいと悟り、私とハイルは戸惑いながらも揃って頷いたのだった。

そんなやりとりを経た後、私とセスさんはハイルに見送られ、村を出発した。

セスさんが操る馬は、相変わらず速かった。村から離れるほどにぐんぐん速度を増し、視界の両脇に映る木立が瞬く間に後方へ流れていく。一瞬ターバンが風に攪われそうになり、私は慌てて片手で押さえる。

「結び直しますか？ 必要があれば馬を止めますが」

「あ、いえ、強めに結んであるので大丈夫です。ありがとうございます」

セスさんはマイペースだが、基本的にとっても親切な人だ。

また無言が続いても気にならないらしく、会話の必要がないと判断したときには一切話しかけてこない。けれど私が質問すると、きちんと答えてくれる。豊富な知識に基づいた丁寧な回答なので、こちらの世界の情報を知りたい私には、とにかくありがたいかった。

知り合ってまだ日の浅い異性との二人旅なんて、元の世界の自分を思えば、考えられないことだ。だがセスさんは信頼できる上に、良い意味で男臭さを感じさせない雰囲気がある。私は、自然と肩から力を抜くことができた。

途中、小さなせせらぎの聞こえる沢で休憩を取ったときも、セスさんは淡々としたものだった。水辺の岩に上品な佇まいで腰を下ろし、藍色の瞳でじつと空を見上げて口を開く。

「だんだんと雲が出てきましたね」

「そういえば……。さつきまで晴れていましたが、夕方にでも、少し降るかもしれませんね」
灰色の雲が漂い、かすかに薄暗くなってきた空を眺めながら、私は頷く。

念のため、荷物を二重の袋に包んできて良かったなと思った。

「今日中に、できる限り進んでおきたいところです。もう少し速度を上げていきましょう」

セスさんは、外套の汚れを払いながら立ち上がる。

「そうですね……。この様子だと、明日の天候も崩れそうですから」

私たちは方針を決め、短い休憩を切り上げたのだった。

その後、順調にダラスまでの旅路を進んだ。

だが五時間ほど経った頃、唐突に足止めを食らうことになる。

——ぼつりと頬に雫が落ちてきた次の瞬間、どしゃぶりの雨が降り出したのだ。

見る間に服が濡れ、身体の熱が奪われていく。

「わっ、急に……！」

私は馬上で片手をかざし、慌てて空を見上げる。

急な雨に見舞われても、セスさんのペースは乱れなかった。雫に濡れた長い黒髪を片手で掻き上げつつ、彼は静かな口調で言う。

「——私の記憶では、この先に小さな宿場町があったはずですよ。そこに急ぎましょう」

どんなことがあれば彼は慌てるのだろうと思いつながら、私は「お願いします」と頭を下げた。

馬を疾駆させ、ほどなくして辿り着いたのは、小さな集落だった。

馬を降り、低い煉瓦が両脇に積まれた入口を進むと、宿屋や食事処と思われる古びた看板を掲げた店がぼつりぼつりと目に入ってくる。

どの店も建物自体はあまり大きくないが、厩舎はそれなりに大きく作られていて、何頭もの馬がひしめいているの見える。すでに多くの先客がいるらしい。

馬の手綱を引いていたセスさんが、そのうちの一軒の前で足を止めた。

「どうやら食堂のようです。少しの間、こちらで屋根を借りましょう」

「ええ。厩舎もまだ空いているようですし、ちょうど良かったですね」

これで、セスさんも馬もちゃんと休憩することができる。私はほっと胸を撫で下ろした。

馬を厩舎に預けて中へ入ると、薄暗い店内には大勢の旅人たちがひしめいていた。がやがやとした喧騒に、食器のぶつかる硬質な音。

雨に濡れた地面の匂いに混じり、コーンスープのような甘い香りもふんと漂ってきた。お盆を手にした前掛け姿のお婆さんが、気さくに声をかけてくれる。

「おや、お客さんたちも濡れ鼠になりなさったね。早く入って温まんさい」

「ありがとうございます、お世話になります」

「奥に暖炉があるよ。ちよいとばかり混んでるがね、なんとか詰めて座っておくれ」卓と椅子が並べられた食堂の奥に、暖炉の炎が見えた。

椅子が足りないらしく、多くの客は暖炉の前の床にそのまま腰を下ろして暖を取っている。その灯りを見ているだけで身体が温まり、雨でだいぶ冷えていたことを実感した。

セスさんは濡れそぼった外套を脱ぎながら、お婆さんに質問する。

「料理を注文したいのですが、どのようなものがありますか？」

「すぐ持つてこられるのは、スープと酒だね。あとは注文が混んでて時間をもらおうと思うよ」

「わかりました。では私は葡萄酒を。貴方は——」

「あ、私はあまりお酒に強くないので、スープでお願いします」

「では、そちらを。あとは肉や野菜の煮込みのようなものがあれば、二人分お願いします」

「酒にスープ、それに煮込みが二つだね。ありがとうございます、ちょっと待つておくれね」

注文を復唱すると、お婆さんは店の奥に向かった。途中、他の客にも呼び止められて忙しそうだ。

どうやら給仕は彼女一人のようなので、注文の品が来るまで時間がかかるだろう。

「では、とりあえず暖炉の火をお借りして、温まりましょうか」

「ええ」

私はセスさんを促して奥へと向かう。人でいっぱいだったが、詰めてもらい、なんとか端の方の床に座ることができた。体育座りで腰を下ろし、ほうつと息を吐きながら、濡れたターバンを頭から外す。雨でだいぶ重くなり、少し気持ち悪かったのだ。

ちなみに、髪はびしょ濡れだったけれど、服はあまり濡れていない。セスさんが私を後ろへ引き寄せて自分の外套で包み、黙って雨避けになつてくれたからだ。

ハイルはもちろん、セスさんもごく自然に紳士的な行動を取れるのだから、すごいと思う。それとも、騎士は皆こういう感じなのだろうか。

ふと隣を見ると、床に片膝をついたセスさんが髪を結んでいた紐を解いていた。

癖のない長い黒髪が、濡れてもなおさらりと流れ、ふいに目を奪われる。薄暗い店内の中、暖炉の灯りが彼の長い睫毛に深い影を作った。

私の視線に気づいたらしく、セスさんは藍色の瞳をゆるりとこちらに向ける。

「——なにか？」

「あ、いえ……」

繊細で整った顔立ちなんだと改めて感心したのだが、男性がそんなことを言われても嬉しくはないだろう。代わりに私は、確認したいと思っていたことを静かに尋ねた。

「ダラスまでは、あとどれくらいあるのだろうかと考えていて」

「あと半日程度です。天候が崩れなければ、もう少し先に進んでおきたいところでしたが」

「この様子では、もうしばらく降り続きそうですね……」

天候はどんどん悪くなり、屋根や窓を叩く雨音が次第に激しくなっている。

たぶん今は午後四時頃だと思うのだが、暗雲が立ち込めているせいで、いつもよりずっと薄暗い。雨が弱まってから先に進んでも、ちょうど良い具合に町や村に着けるかわからない。

今日はこれ以上欲を出さず、この集落に宿泊した方が無難かな……

そんなことを考えていると、給仕のお婆さんに声をかけられた。

「お待ちどおさん、注文の酒とスープだよ」

「ありがとうございます」

思ったより早く注文の品が運ばれてきた。私は微笑みながらお礼を言い、マグカップに似た器を受け取る。さっそくそれを口に運ぶと、コーンスープに豆乳を混ぜたようなあつさりした味だった。体内にじんわりと温かさが行き渡り、思わずほうっと息が漏れる。

セスさんも葡萄酒を口に運びながら、お婆さんに質問する。

「随分と混んでいるようですが、いつもこちらはこのような様子なのですか？」

「いやあ、そうだったらありがたいんだけどね。残念ながら、ここ最近だけさ。いつもは四、五人お客さんがいればいい方だよ」

皺の刻まれた片手を振り、お婆さんは苦笑して続ける。

「どうも聞いた話じゃ、この先のダラスで趣向の変った見世物をやってるみたいだね。見物客や商売人が向かってきているようだよ」

「趣向の変わった……もしかしてそれは、精霊の賢妃の再来と呼ばれる方の見世物でしょうか？」

「おや、お客さんたちも耳が早いねえ。あたしも人伝に聞いた話だけど、そうらしいよ。まあ他にも色んな旅芸人がいるってことだから、それだけが目当てじゃないんだろうけどね」

しわがれた声で愉快気と言うと、お婆さんはお盆を手に戻っていった。

私は、セスさんに小声で話しかける。

「なんだか、だいぶ噂が広まっているようですね……」

「ええ。私が昨日メスカイトの町で聞いたときは、そこまで盛り上がっている様子でもありませんでしたが。ダラスに近づいたせいかな、あるいは——」

そのとき、入り口の方からがやがやと賑やかな声が聞こえてきた。どうやら、また新たな客が入店したようだ。

騒がしかったので複数人いるのかと思っただが、店内に入ってきたのは意外にも一人の男性客だった。禿げ頭がっしりした体型で、三十代に見える。

前に出会った行商人のニコラスさんに似た服装からして、彼もまた商人なのかもしれない。

大きなリュックの隙間から、太い棒のようなものが二つ三つ、によきと突き出ている。あれはなんだろう。

「いやはや、散々な天気じゃのう。参った、参った！」

大声で笑いながら、その男性は店の中央へ歩いてきた。陽気な人らしく、他の客たちに声をかけている。すると、私の隣に座っていた青年が、ちっと舌打ちした。この青年もまた、行商人風の格好をしている。

「あいつか……嫌な奴と一緒になっちまったな」
「え？」

思わず行商人風の青年を見返すと、彼は声を潜めて忌々しげに答えた。

「ここいらを通り道にしてる商人仲間じゃ、煙たがられてる奴なんだよ。武器商人なんだが、元々自分も剣を振るってたとかで、腕っふしを自慢してやたらとでかい面しやがる」

「ああ、それで、身体つきががちりされているのですね……」

言われてみれば、リュックから突き出ている棒は、剣や棍棒の持ち手のようだ。

それらをまじまじ見ていると、青年は肩を竦めて言った。

「なんだ、武器商は初めて見るのかい？ まあ、身なりからしてこの辺の人間じゃなさそうだが」

「あ、はい。私の住んでいた村では、そういった商いをされる方がいなかったものですから……。この先にあるダラスは商業街だと聞きましたが、これから初めて向かうんです」

「そうかい。俺もダラスに行くところだが、あそこはノルヴェス騎士団の膝元だからな。武器以外にも、騎士にまつわるものが色々ある。気になるなら見て回るといい」

「へえ……そうなのですか。それは楽しみです」

私が微笑んで答えると、青年はまたあの商人に鋭い視線を向けた。

「ああ。ただ、もし護身の武器が入り用でも、あいつから買うのはやめといた方がいい」

かなり含みのある感じの声音だ。私はその様子にいくらか戸惑う。

「ええと、だいぶ気をつけた方がよい方ですね。一見、陽気な方にも見えますが……」

「そう見えるのは最初だけさ。今だって、すぐに我が物顔で振る舞い出すだろうぜ」

彼はそれだけ言うと、関わり合いになりたくないといった風に商人から顔を背け、また暖炉の火に向き直った。過去になにかいざこざでもあったのだろうか。

初めは彼の様子を不思議に思っていた私だったが、ほどなくそれが正しい忠告だったと理解した。腕っふしが自慢らしいその商人は、隙間なく人がいるテーブルに行くと、ひ弱そうな体格の男性

客の肩を後ろからぐいと押しつけた。

「おい、これじゃ儂が座れんだろうが。そこを退かんか」

「ひっ……！」

気弱そうな客に凄んで退かせ、空いた席にどつしりと腰を下ろす。

そして大股を開いて座った上に、リュックを自分の脇に置いたため、別の客も椅子から押し出される。さすがに迷惑に思ったらしく、その客が眉を顰めた。

「おい、あんたいきなりきてなにを……」

「なんじゃ、文句あるんか、我」

「い、いや……」

だが、腕の筋肉を盛り上げた商人に睨まれ、その客もさすがと退散する。次第に他の客たちも、

目を合わせないようにしながら荷物を抱え、一人二人とそそくさ去っていった。

店員のお婆さんも困った表情で男を見ているが、諦めた様子でなにも言わずにいる。

我が物顔で振る舞う商人は、自分の座る場所まで暖炉の温もりが届かず、不服だったらしい。今度は暖炉前に座る私たちに向かって、大声を張り上げた。

「おい、お前らもそこを退かんか！ こっちまで火が届かんじやろうが。寒くてかなわんわ！」

そこで堪りかねたように、先ほど私に話しかけた青年が立ち上がった。

「さつきから黙って聞いてりゃ、あんた何様だ。俺たちはさぶ濡れで、暖を取りたくてこの店に入ったんだよ。あんた、ちつとも濡れてないじゃないか。それで寒いとか、よく言えるよな」

その言葉通り、男は外套の下は少しも濡れておらず、寒さに震えている様子もない。

「濡れとろうが濡れてなかるうが、儂が寒いと感じたらそうなんじや。さつきと退け」

すると青年行商人が片手で店内をばつと示し、反論した。

「いいか、ここはあんたの家じゃないんだよ。俺たちは皆、同等の客なんだ。あんただけ特別扱いしろなんて、そんなふざけた話聞けるわけないだろ」

「ふん、お前みたいな若造と一緒にされちゃあ困る。儂やあ、この店にはいつだって誰より多めに銭を置いてやってる。日銭を稼ぐのもやつとのひよつことは、格が違うわ」

「なにい……？ てめえ、言ったな！」

青年の顔がかつと朱に染まる。駄目だ、このままだと雲行きが怪しい。そういえば、さつきからセスさんが静かだなどと思い、私は隣に目を向けた。

彼はいつものように感情の見えない眼差しで成り行きを眺めながら、髪を後ろで一つに結び直していた。

「あの、セスさん……」

「いざとなれば私が出ます。貴方はここにいてください」

どうやら男性たちの様子を見つめつつ、動くべきかどうか状況を判断していたようだ。

だが、彼や私より先に、前へ進み出た小さな影があった。

それは、粗末な服を着た八歳ほどの男の子だ。焦げ茶色の髪の少年は、木の棒を両手で握り締め、禿げ頭の商人に向かって叫ぶ。

「やいやい、そこまでししろ！」

「なんじゃあ？ この餓鬼は」

怪訝な表情を浮かべた商人に、少年は声を張り上げた。

「俺、知ってるんだぜ。お前みたいな奴は悪者って言うんだ。そんで、騎士さまに倒されるんだ！」

「なんだとお……？」

「前来たときも、お前、言い合いになった客のこと殴ってたじゃねーか。あのおっちゃん、怪我して二日も床から出られなかったんだぜ！」

もしかすると彼は、この店の子供なのかもしれない。以前にも同様のことがあったのなら、なおさら許せないだろう。

だが、こうしてあの男に食ってかかるのは危険だった。

案の定、男は子供相手でも手加減する気がないらしく、胸の前でぼきぼき両指の骨を鳴らし始める。

「よくも言ってくれたのう。みすぼらしいくそ餓鬼が」

「へっ、そんなガキにいいように言われてんのはどつちだよ！ なっさけねー！」

「なんじゃとう……？」

少年の挑発に、男が額に青筋を浮かべた。まずい。私はとっさに立ち上がり、叫んだ。

「あの、お二人とも、もうその辺りで……」

「じゃかましいわ!! 外野は黙っとれ！」

だが、私の声は男の怒号に掻き消される。

男は少年へ近づき、むんずと襟首を掴んだ。

「いい躰をされてきたようじゃのう……。だがな、大人に逆らったら痛い目を見るってことを、

ちつとは知つた方がいい」

「あつ……。やめ……！」

止めに入ろうとしたが間に合わなかった。少年は襟首を掴まれ、そのまま壁に向かって放り投げられる。壁に背をどんと打ちつけ、小さな身体はずりりと下に落ちた。

私は急いで駆け寄り、少年を抱き起こす。

「大丈夫ですか？ 怪我は……」

「うー……いつてー……くそ！ なにすんだ、あいつ」

自分の背をさすりながら悔しげに言う少年を見て、ほっとする。どうやら大きな怪我はせずに済んだようだ。私は少年を腕の中に庇い、男に鋭い視線を向ける。

「どうしてこんな乱暴なことを……打ち所が悪ければ、大怪我をしていたかもしれないのに」

「なんじゃ、文句があるのか」

男が凄む。だが私は、過去に傭兵に威圧され、幾度も殴られた経験がある。そのせいか、恐怖よりも理不尽な暴力に対する怒りを感じた。

「ええ。この子はまだ幼いのです。身体だって小さいし、私たち大人よりよほど怪我に弱い。たとえ貴方を怒らせることを口にしたとしても、暴力に訴えるべきではありません」

そもそも少年が食ってかかったのは、男の言動が原因だ。

「ふん！ 大人しげに見えて、言うのう。怪我の一つや二つした方が、その餓鬼のためじゃ。頭をぶつけた方が、利口になるじゃろう」

そして男はリュックから棍棒をぬつと一本抜き取り、これ見よがしに掲げる。

「儂やあな、元々これを振るって稼いでおったのよ。金になるから今は武器商をやつとるが、お前らなんぞ片手でひと捻りできるわ」

今は、この男を下手に刺激してはならない。そう思い、私は表情を引き締めて言う。

「……どうかその武器はおしまってください。それは貴方の大切な商売道具であって、人を傷つけるためのものではないでしょう」

「確かに売り物じゃがなあ……客にもならん奴の前では、殴るのに使った方がずっと役に立つ」



そのとき、私の腕の中にいた少年がよここんど反動をつけて立ち上がり、声を張り上げた。「へっ、それだつて大方、別の商人から騙し取つたんだろ。お前が他の商人を脅して品を買い叩いてるところ、前に見たんだ。この卑怯者が！」

少年の暴露に、男は顔を真っ赤にして叫んだ。

「この餓鬼やあ、さつきからいらんことを言いよつてからに……！ いいからお前は退け!!」
「わっ……!!」

男は怒りに任せ、私をどんと後ろに突き飛ばす。そして少年の頭上に、棍棒を振り上げた。駄目だ、殴られる……!!

思わず息を呑んだとき、音もなく男に忍び寄る影があった。——セスさんだ。

いつの間にか私たちの傍に移動していた彼は、少年と男の間にすつと入り込む。そして目にも留まらない速さで剣を抜き——

気づいたときには、鋭い切っ先が男の喉元にびたりと突きつけられていた。

「せ、セスさん……」

あつという間の出来事に、私は目を見開く。

そして商人もまた、衝撃を受けたらしい。男は、驚きと恐怖に、口をパクパクさせている。

「なっ……お、おま、いつのまに……」

セスさんは、いつもと変わらない抑揚のない声で男に尋ねる。

「先ほど聞きましたが、貴方は武器商人とのこと。ならば、私のこの剣も鑑定して頂けませんか」



「か、鑑定……？」

「ええ。言葉や拳を交わすよりもこの方が、貴方には見えてくるものがあるでしょう」

セスさんの言葉に、男は一瞬わけがわからないといった様子で眉を寄せた。

だがセスさんに剣を下ろす様子は見られない。男は、恐る恐るといった様子で目の前の剣に視線を向けた。切っ先から刃、柄へと順に視線をすべらせる。

すると、恐怖を宿した瞳が、次第に熱を帯びた眼差しへと変わっていった。

「こりゃあ……こいつは、ミンドルの鍛冶師の……」

ごくりと男の喉が鳴る。どうやらそれは、非常に価値のある逸品だったようだ。

そしてその剣の使い込まれた握りと、セスさんの機敏な動きから、目の前の相手に下手に噛みつくべきではないと判断したらしい。

途端に、男の声音が上擦ったものに変わる。

「わ、儂やあ、ちよつとばかりしらしめてやろうとしただけじゃ。断じてそれだけだ」

「では、そのお説教もじきに終わる頃合いでしょうか」

「お、終わった！ もうなにも言うつもりはない!!」

「そうですか。それならば良かったです」

男の言葉を聞くと、セスさんは剣を収めた。男の戦意を喪失させることに成功したらしい。良かった……。私はほつと息を吐く。だが店内の様子に気づき、はつとする。

店内にいる客たちは、もはや男の方を見ていなかった。代わりに、不気味なものを見るような眼

差しをセスさんへ向けている。

音もなく男へ忍び寄り、無表情で躊躇いなく刃を向けた姿が、人々に恐怖を与えてしまったのかもしれない。また、彼の青白い肌や整った容姿が、悪い方向へと働いていた。

『死神セス』と呼ばれる彼。今のセスさんは、その呼び名を体現しているかのように見えた。

だが私は、彼が情のある人だと知っている。

だから、慌てて店内の客たちに向かって口を開いた。

「あ、あの！ 彼は決して斬るつもりはなくて、こうして場を収めるために……」

だが、客たちの様子は変わらない。先ほど気さくに話してくれた給仕のお婆さんも行商人の青年も、ふいつと視線を逸らしてしまう。関わり合いになりたくない、彼らの態度が物語っていた。

「あの、本当に、傷つけるつもりは少しもなくて……」

私の言い方が悪かったのかもしれない。セスさんのことを、もつときちんと伝えないと。だが焦れば焦るほど上手く喋れず、客たちは視線を逸らしていく。

そんな私に、セスさんが静かに呼びかけた。

「構いません、出ましよう。ここには留まらない方が良さそうだ」

「ですが、セスさん……」

彼は、怪我人を出さずにこの場を取めた。わかりづらいつらいつらいけれど、そこには彼の冷静な判断と、人を守るうとする心があったはず。彼が理解されないこと、そしてそれに慣れていることが、もどかしくて堪らなかった。

「多少動いて身体も温まりました。ならば、ここに残る理由はもうありません」
そう言うが、セスさんの髪も服もまだ乾いていない。食事も満足な休憩も、まだ取っていないの
に。とはいえ、私が変に粘っても彼の気持ちを邪魔するだけだ。

「……わかりました。私も出ます」

セスさんは私の言葉に頷き、そのまま入口に向かった。

途中、彼は入口横の台に代金を置いた。私はその額を覚え、後で返そうと心に誓う。

そして私は、店を出る前に、一度だけ振り返った。

「あの……お騒がせして申し訳ありませんでした。どうぞ皆さん、良い夜を」

こんな雰囲気の中で良い時間を過ごせるかはわからなかったけれど、店内が少しでも普通の空気に戻ってほしいと願う。

私は最後にぺこんと頭を下げ、セスさんに続いて店を後にしたのだった。

外に出ると、まだ雨は降り続いていた。とはいえ、そのまま店の軒下に居座るわけにもいかない。
セスさんと共に近くにある大きな樹まで走り、その枝下で雨宿りする。

少しは雨の勢いが収まってくれると良いのだけど……。木の下からそつと手を伸ばし、掌で雨
の強さを確かめていると、セスさんがぼつりと呟いた。

「先ほどは、貴方にも不快な思いをさせました。申し訳ありません」

「え……いえ、そんな、謝罪されるようなことでは……」

謝られたことに驚き、私は首を横に振る。

「あの……私もお礼を言わせてください。あの場を収めてくださって、ありがとうございました」

「それこそ、貴方がお礼を言う必要のないことでは？」

そこは、やはりセスさんだ。遠慮なく、淡々と思つたことを返してくる。

いつもの彼らしい様子に少しほっとして、私はくすりと微笑む。

確かに、彼が助けようとしたのはあの少年であつて、私ではない。私がこんなことを言うのは
間違いなのかもしれないけれど――

私は、まっすぐに彼を見つめて言葉を続ける。

「ええ。そうなのですが、正しい行動を取った方には、きちんとお礼を伝えるべきだと思つて」

「正しい行動……ですか。店内の客を無駄に怯えさせたのに？」

薄暗い木立に雨が降り注ぐ中、こちらを見返す彼の眼差しは冷静だ。

小川の流れにも似た雨音に掻き消されないよう、私ははつきりとした声で返す。

「けれど、誰も怪我らしい怪我をしていません。それは、セスさんの行動のおかげだと思います。

ただ……」

「ただ？」

感情の见えない彼の藍色の瞳に見据えられ、一瞬逡巡したものの、私は口を開く。

「……誰も大きな怪我はしませんでした。セスさんの心は、ほんの少し傷ついたのではないかと
思っています」

「そこまでやわではありません」

心外だ、といった様子のセスさんに、私はまったくすりと微笑む。

「……ええ。セスさんは剣の腕前だけでなく、心もお強い方だと知っています。今の出来事も、セスさんにとつて、指先の小さな傷よりささやかなことだったのかもしれない」

きつと、そうなのだろう。彼がこれといったダメージを受けていないことはわかる。けれど……私は雨の降る灰色の空を見上げて、続きを口にする。

「けれど……ごく小さな傷でも、それが少しずつ増えていったら、いつか大きな傷になると思うから」

どんなにささやかな誤解でも、どんなに彼の精神が強くても、全く平気でいられるはずはないと思つた。守つた人たちに恐怖の眼差しを向けられて、嬉しいわけがない。

——セスさんは、そんな風に傷つけられていい人ではない。

「だから、今はお礼を言わせてください。セスさんは、少なくとも私の目から見ても、間違つた行動は取っていません。……本当にありがとうございます」

穏やかに微笑んで言つた私を、セスさんはじつと見つめる。そして彼は、ぽつりと咬くはいた。

「貴方は……妙に人を脱力させますね」

「ええと……」

もしかして、おかしいことを言ってしまったのだろうか。

私が戸惑っていると、セスさんは言葉を続けた。

「……いえ。ならば私も流さず、きちんと口にします。先ほどの件ですが、はつきり言つてしまえば、剣を抜く必要はなかった」

「セスさん……？」

彼は抑揚おさげのない声音で続ける。

「可能な限り早く男の動きを封じたかつたという点がありますが、素手で押さえられない相手ではない。先ほどのような行動を取つたのは、私の未熟さゆえです」

「未熟さ……」

なんだかセスさんと繋がらない言葉だ。剣の手練てれであることから考えても、彼の常に冷静な性格から考えても、しつくりこない。首を傾かじげれば、セスさんは溜息ためいきと共に口を開いた。

「……同じ年頃の兄弟がいるので」

「え？」

一瞬なにを言われたのかわからず、私はきよとんとする。

「宿屋の少年と同じ年頃の弟と妹がいるので……子供が殴られるような場面を見ると、考えるより先に身体が動いてしまう。先ほどの顛末てんまつは、私の未熟さが招いたことです」

その言葉に、もしかして……と私は目を見開く。さつきは全然気づかなかつたけれど、あの少年を助けに入ったとき——

「もしかして、セスさん……あのとき、怒っていたのですか？」

「快はやみ気分ではありませんでした」

そうか、あれ、怒っていたのか……。気がつけば私は、やや呆然と呟つぶやいていた。

「セスさん、わかりづらい……」

「わかりやすいと言われたことは、一度もありません」

その淡々とした切り返しに、私はふふつと噴ふき出してしまった。すると、じろりと見返される。

「なぜ笑うのですか」

「い、いえ……すみません。私は、まだまだセスさんのことをよく知らないんだなあと思っ
て」

なかなか笑いが収まらず、私はくすくすと笑いながら言った。

こうして一緒に過ごす時間が増えて、なんとなくわかった気になっていた。セスさんは剣や乗馬の手練てだれで、マイペースで冷静で……親切な人。

彼に助けられることはあっても、私が彼を助けることはできない。そう思って、道中もずっと彼に守られてばかりだった。ふいに降ってきた雨からも、暴力からも。

けれど私が知っていたのは、彼の強い面だけだった。——彼だって、一人の人間だ。決して完璧なわけではないはず。

さつき、私がかろうじて自信を持って彼のことをフォローしていたら、客たちはこちらを信用してくれなかったかもしれない。私が焦らず、落ち着いて語りかけていたら……

私には、セスさんの仲間でありたいという気持ちが足りなかったのだと思う。それゆえに、自分から行動する努力おこたを怠おこたっていた。

私なりの方法で仲間を守るには、まず皆のことを深く知る必要がある。

「あの……セスさん。もしご不快でなければ、私はもう少し貴方のことが知りたいです」

道中、彼にこの国の慣習を尋ねて知識を増やすつもりだった。けれどその前に私は、目の前にいる彼のことを聞くべきだった。一緒に旅する仲間なのだから。

それは、今からだって遅くないはず。

「私のこと……?」

セスさんが驚いたように目を瞬またたかせる。私は穏やかに微笑んで頷うなづいた。

「ええ。セスさんがこれまでどう過ごしてこられて、今はなにを思っ
て戦たたかっていらっしやるか」

「聞いても、特に意味のないことだと思いますが」

相変あひらわらずの無表情で切り返した彼に、私は静かに首を振る。

「いいえ、きつと意味はあります。また今日のようなことがあったとき、私が力をお貸しすることが
できるかもしれません。それに、セスさんのことを知って、好意を持たれる方も増えると思
います」

「別に好かれても……」

セスさんはわずかに肩を竦すくめる。

そして彼はそのまま、樹の幹にとんと背を預けた。セスさんはいつもぴんと背筋の伸びた姿勢を保
っていたから、少し珍しく感じる。もしかして、そんなに脱力させてしまったのだろうか。

いや——それとも、だいぶ疲れているのだろうか。私は心配になり、そつと彼の顔を覗のぞき込む。

「あの、セスさん？ お疲れでしょうか？」

「……いえ。特に疲れたわけではありません。多少、隊長の気持ちがわかっただけです」

「ええと、ハイルの気持ち……ですか？」

なんだろう、今、特にハイルの話題は出ていなかったと思うのだけど。

不思議に思っただけで聞いて返した私に、セスさんはなにも言わなかった。

会話は終わったという様子で、雨の降る木立を見つめている。相変わらずマイペースな彼にいくら戸惑っている、後ろから声をかけられた。

「なあ、兄ちゃんたち！」

「え？」

驚いて振り返ると、少し離れた場所に、先ほどセスさんが助けた少年が立っていた。着古した服に、焦げ茶色の髪の毛の子。腕白少年といった感じで、茶色の目が爛々と輝いている。セスさんに對して怯えた様子もなく、むしろ興味津々な様子だ。

少年はたたくと走り寄ってきて、私たちの手首を掴み、ぐいっと引つ張つていこうとする。

「なあ、俺の家に来いよ。俺を助けたせいで、休む場所がなくなっちゃったんだろ？」

「あつ、いえ、お気持ちは嬉しいのですが、あの店にはもう……」

たたらを踏みそうになりながら、私は慌てて首を振る。

彼が先ほどの店の子供ならば、再びお邪魔することはできない。だが、すぐに元気な声に遮られた。

「違つて。俺の家はあつち！ いいから来いって」

彼が指差したのは、店とは真逆の方向だった。どうやら彼はあの店の子供ではなく、近所に住む子供だったらしい。だが、小さな子の足で気軽に行けるとなると、あまり店から離れていないのだから……。どうすべきか悩んでセスさんに視線を向けると、彼は静かに頷いた。

「この近くに、他の町や村はないはずですよ。……雨がやむ様子もない今、野宿はできることなら避けたい。一度お邪魔してみましよう」

「はい。わかりました」

私は、ほっとして頷き返す。夕暮れが近づき、また少し冷え込んできた今、屋根のある場所に行けるのは、正直なところありがたかったのだ。

先ほどの店の厩舎から馬を連れ、少年に案内されたのは、宿場町の中でも端にある古びた一軒家だった。家の前にある樹の下に馬を繋ぎ、背に積んでいた荷物を下ろすと、私とセスさんは玄関へ通された。

「隙間風が入って寒いかもしんねーけど、外よりはましだと思っぜ。ほら、いいから入れよ」

「あ……はい、失礼します」

親御さんの同意もなく、お邪魔して大丈夫だろうか。

衣服についた雫をそっと払いながら、少し心配になって室内を見渡す。

居間らしいその部屋は、テーブルの上に小さな燭台がぼつんと一つ置いてあるだけで、がらんと

していた。家具などはほとんどなく、慎ましい生活をしていることが窺い知れる。

そのとき奥から二十代後半くらいの女性が出てきた。

少年と同じ焦げ茶色の髪を一つに結わえた、線の細い女性だ。

「あら、コリン。お帰りなさい、お客様？」

「あっ、母ちゃん！」

少年はコリンという名前だったらしい。

彼は女性のもとに駆け寄ると、私たちを右手で示して紹介した。

「食堂でやな奴がいてさ。殴られそうになったとこを、この兄ちゃんたちに助けてもらったんだ。すごかったんだぜ！」

「殴られそうに……」

コリンくんのお母さんが、口に片手をあてて息を呑む。

少年の身体に目を走らせて、ほっと息を吐くと、私たちに感謝の眼差しを向けた。

「きつとこの子が、いつものようにやんちゃをしでかしたんでしょう……本当にありがとうございました。……コリン、ほら、貴方もちゃんとお礼を言って」

「はーい。兄ちゃんたち、ありがどうな！」

助けたのはセスさんのだが、彼は「いえ」と短く答えただけで、特に会話を弾ませる気はないようだ。ここは代わりに私が対応した方が良さそうだと判断し、そっと親子に向き直る。

「何事もなく良かったです。お二人とも、どうか頭を上げてください。——それにしてもコリン

くん、よくあのお店に遊びに行っているのですか？」

話題を変えようと、のんびり微笑んで話しかける。

するとコリンくんは、えへんと胸を張った。

「違うって。俺、遊びに行ってるんじゃないよ。稼ぎに行ってるんだぜ」

「稼ぎに？」

意外な言葉に、私は驚く。日本でいえば小学校低学年くらいに見える彼から、そんな言葉が出るとは思わなかったのだ。すると、お母さんが恥ずかしそうに目を伏せた。

「あの店には行商の人たちが多く来られるでしょう？ こうした雨の日には、商売道具が濡れてなにかと困っている人も多いものですから、商品を拭いたり雑用のようなことをしたりして、ちょっとしたお駄賃を頂いてるんです」

「へへー、すごいだろ！ 俺、なんだってできるんだぜ！」

「主人が亡くなった今、私の糸紡ぎの仕事だけでは食べていけなくて……こうしてコリンが頑張ってくれているんです。それに、あの店には我が家と違って暖炉があるので、働いている間は、この子も身体を冷やさずに過ごせますから」

貧しい暮らしを明かすのが恥ずかしいのだろう。彼女は、消え入るような声で説明した。

ただ、彼女の眼差しには、幼いながら自分を支えようとする息子への愛情と誇らしさが透けて見える。それが伝わってきて、私は小さく微笑んで言った。

「そうでしたか……。自慢の息子さんですね」

「ええ」

儂げな雰囲気の彼女だったが、とても力強く頷いた。

そんな二人を見てみると、ミレーユの村が脳裏に浮かぶ。村でも、日々子供たちが働いていた。コリンくんほど幼い子はさすがに稀だったけれど、メアリーのよう家事を取り切っている子もいれば、農作業など家業を手伝っている子もいて……

この世界の村や町に住む子供たちにとって、それがごく当たり前の生活なのだと思ひ知る。一方、大都市には貴族がいて、幼い頃から贅沢な暮らしを送っているという。——たぶん、この世界の貧富の差は、私が思っているよりずっと大きい。

そんなことを考えていたら、コリンくんの少し弱気な声が出た。

「なあ、母ちゃん。兄ちゃんたちを家に泊めてもいいだろ？ もう遅いし、俺のせいで食堂にいられなくなっちゃったんだ」

「まあ……そうだったの。色んなことがあったのね」

「うん。悪い奴をやつつけたのに、皆変な目で見て……」

悔しさの滲んだ声で、もどかしそうにコリンくんが俯く。お母さんはそれ以上にも尋ねず、代わりにくしゃりと彼の髪を撫でた。

「そうね……。じゃあ、納戸から藁を出してきてくれる？ お兄さんたちに寝床を準備しないと」

その言葉に、コリンくんがぱつと顔を上げた。

「……！ わかった！ 俺取ってくる」

笑顔になったコリンくんは、そのまま部屋の外に駆け出していった。このまま泊めてもらえるらしい。ありがたいが、感謝と同時に戸惑いも感じて、私はそっと尋ねる。

「あの、よろしいのですか？ 泊めて頂けるのはとても助かりますが、私たちは少しの間、雨宿りさせて頂くだけでも、十分……」

若い母子だけの家に、見ず知らずの男二人が泊まるのは、不安なのではないか。だが、コリンくんのお母さんはゆっくりと首を振る。

「いいえ。息子を助けてくださった方になんのお礼もせずお帰ししたら、亡くなった主人に叱られます。それに……コリンもきつと、ふてくされるでしょうから」

ちようどそのとき、コリンくんの元気な声が聞こえてくる。

「おーい、すぐに準備できるぞ！ 母ちゃんも兄ちゃんも、ごちやごちや言っていないで早く来いよー」

「——もうすでに、ふてくされているようですが」

それまで静かだったセスさんが、淡々と言う。私とコリンくんのお母さんは、思わず顔を見合わせた。次いで、どちらからともなく、ふふつと笑い出す。

「……どうやら、おかしな遠慮をするより、今は素直にお世話になった方が良さそうですね」

「ええ、是非そうしてください」

コリンくんのお母さんも、先ほどより肩の力が抜けた様子で頷いた。

こうして、私たちの今晚の宿が無事決まったのだった。